

潮にむかって立つ

この男が流れを変える

対談者 映画監督・松山 善三

昭和四十七年六月一七日にはじめて自民党総裁選に出馬表明し、七月五日、一〇一票第三位を獲得した。このときの選挙用PR資料で、経歴、人柄、思想、政策等を語る。

民族のコアを守るために

松山 大平先生は、昨年、田園都市国家構想を発表されました。私たち市民は、公害のない住みやすい世の中にはいちばん関心がありますので、そのへんからお話をうかがわせていただきたいと思いません。その構想の根本はどういうものでしょうか。

大平 まず、いちばんの根本は、人間の生活の中で先祖の墓とか、あるいは自分の出た学校とか、それらにまつわる人間群像といったものが、溶け込んでおることが望ましいと思います。

松山 そうすると、田園都市国家とは、そういう地域社会……非常に思いやりのあふれた、そしてなおかつ豊かな自然の中に含まれた地域社会を寄せ集めたということですか。

大平 そうですね。そういう条件がまずあるということ。それから第二に民族の生命という点から考えますと、田園というか、農村というか……足に感ずる露の感じとか、秋の雨とか、春の日ざしとか、そういうようないろいろなものも民族のコアを形成しておるんじゃないか。そういうものを失いたくないという配慮。それから第三には、公害ができるだけない状態、それから交通があまり混雑しないとか、あるいは大学その他教育施設も整備しておるとか、あるいは自分たちが雇用される経済の機会が恵まれておるとか、そういうようなことがその次に必要じゃないかということ。それからさらにもっといえば、あんまりでかすぎないようにすること。また、あんまり小さすぎていけない。一人の首長が管理可能なものでありたい。そういう感じをひつくるめて、適切かどうか判らないが田園都市国家ということばで、表現したつもりです。

ふるさとの思い出と結びつく田園都市国家

松山 そうすると、この田園都市の大きさ、あるいは人間の数というようなものに、だいたいの何か、目安のようなものがあるのでしょうか。

大平 まあ、盛岡とかあなたと同名の松山ぐらいの人口二十万か三十万あたりがいいんじゃないかというような感じですが……。

松山 そういう条件がそろった、人口二、三十万の都市。それが集まって国家を形成するということですね。

大平 そう。都市と一口にいうけれど、田園都市であって、つまりそこに農村もあれば重工業も軽

工業もある、あるいは教育施設もある、文化施設もある。それらがバランスのとれた一つのまとまりをもつておる。経済の機会もあれば教育の機会もあり、われわれがレジャーを消費する機会もある。しかもそこは先祖の墓にも近いし、自分が出た学校のいらかも見える、そういうような感じだね。

松山 いま現在、好むと好まざるとにかかわらず、東京都の人口は一千万になってしまっていますけれど、先生のこの田園都市国家というふうな考え方からいきますと、非常に大きくなりすぎてしまったというふうな感じがしますね。

大平 ええ。東京は少なくとも、これは半分以下にしないといかんですね。東京というのは中枢管理機能があればいいんじゃないでしょうか。いわゆるぜい肉はいらないんじゃないでしょうか。

松山 なるほど。この田園都市という発想は、先生が農村の出身でいらっしやるということ、あるいは少年時代からの思い出みたいなのと結びついておりますか。

大平 そうですね。確かにいちばん身近に、からだでわかる生活という意味だね。香川県の最西端の村で代々の百姓の家に生まれた、そこで中学校まで出ましたのでね。

松山 その頃の先生のおたくの暮しは、決して豊かではなかったと思ってよろしいんですか。

大平 ええ、豊かじゃなかったですね。

松山 子供のころの思い出で、うれしかったとか、悲しかったとか、苦しかったとかいうものはありませんか。

大平 子供のときから……小学校へあがる前からもう仕事をしていましたからね。

松山 農家で働いたりした……。

大平 そうです。それが中学校まで続いたわけですからね。ほんとは遊びたいんです。遊びたかつ

たけれども、遊ばしてくれなかった。そういう毎日でしたな。

松山 でも、先ほどこよっと学校の問題が出ましたけれども、いわゆる農業　つまり、ものを自然の中から生産していくという作業の中には、教育という事業の根本みたいなことが存在しているわけですね。

キリスト教へ傾斜する

松山 先生はその後、キリスト教の伝道者を志されたとうかがっておりますけれど……。

大平 それは中学校を出てからですな。中学校を出た年の秋でしたかな、キリスト教の話聞いて興味を持ちまして、ずっとそれからキリスト教に親しんできました。伝道者を志したというよりは、伝道に役立つような仕事を仲間でしようじゃないかということでした。自分自身が伝道者になるというほどのうぬぼれた気持ちはなかったんです。ある人が薬をつくって、その収益で伝道に役立てようという仕事を計画しまして、高松高商の私ともう一人神戸高商の友人と三人でやらんかという話が出たので、その中に飛び込んだわけです。ところが、なかなか事業を始めるなんていうことはうまくいきませんで、一年間いろいろ模索しましたけれども、どうもうまくいきそうにない。それでよくは大平 学を志して、翌年……だから一年むだにしまして、一橋へ入ったわけです。

松山 なるほどな。一橋を出られてからはますます……。

大平 ええ。そのときはもう実業界へいくのがあの学校からいくと当然なことなんだけど、大蔵省のほうでこないかという話がありましてね、先にそのほうが約束してくれたから行ったわけです。

松山 そうですか。初めから政治家を志していらつしやうたわけではないのですか。

大平 そういうことではないんです。格別に動機はないんですね。池田勇人先生に奨められて、それじゃ、みんながやっておることだから、おれもやってみようか、というだけの話でしてね。格別、青雲の志があつたわけでもないし、経国の理想があつたわけでもない。きわめて平凡な動機です。

かけがえのない家庭

松山 政治家はだれでもよき政治を志向しているというふうに思っていますけれども、現在の日本の政治状況であるとか、あるいは社会状況であるとか、人間関係というのは、現時点で先生ほどの程度満足していらつしやいますか。また、その質問が妥当でないとすれば、どうあらねばならないというふうにお考えでしょうか。

大平 ほくはね、国民一人一人が実は政治をしておると思うんですよ。家庭の政治、それから職場の政治、いろいろなサークルの政治……これもみな政治なんです。政治とはものをまとめるというか、秩序をつけるというか、そういう作用ですからね、それはみんなやっておると思いますよ。われわれのやっている議会政治は、政治のごく一部門をやっておるにすぎないということですね。

議会政治だけに限定していえば、市町村から国会に至るまではいります。現状についてはほくはいへん不満ではあるけれども、ともかく国や地方団体のことについて、いちおうの締めくくりはつけておると思います。落第点はかりとっているようにいわれますが、それはやや酷じゃないかという感じもしますよ。

松山 いま、国民の一人一人が政治をしているとおっしゃいましたが、国民一人一人にも、一つの目標というんでしょうか、その地域社会における福祉であるとか、あるいは自分たちがその一員なら、地域社会を守るために自分たちが何をしなければならぬかということがありますね。逆にいえば、それが大きな政治につながっていきますですね。そういう意味で、先生は国民は何をなすべきかというふうなことをお考えになっていらっしゃるのでしょうか。国民に要求するっていったら変かもしれないけれど……。

大平 まず家庭ですね。家庭は日本のかけがえのない構成要素です。家庭とは、ご主人があつて、みんながそこで秩序ある、愛情の行き届いた、意思のよく疎通された、信頼関係のある集団、そういうものでなければなりません。ありません。

松山 国民の家庭の一つ一つはそうあるべきですね。

大平 とにかく、そういうところへ直接、政治がはいつていくことはできないわけです。またすべきでもない。日本人の生活の半分以上 教育も産業も政治も、極端に言えば芸能の分野でも、家庭に根をもっているんじゃないでしょうか。

松山 はい、そうだと思います。

大平 そういう意味で国民は一日一日、非常に大事なことをやられておるわけですから、まず家庭生活を充実することをしっかりやっていただきたい。次に、国民が大きなエネルギーを費しておるのが職場です。職場の秩序、職場の信頼関係、活力ある仕事というようなものは、もちろん、個々の職員の仕事です。それがまた非常に大きな政治のファクターになっておる。

したがって、われわれ議会政治家が考えることは、いわば職場でもできないこと、家庭でも手が届

悔いはない。政治家にならなくてどうなっておっただろうかと考えてみた場合に、やっぱりいまのほうが生きがいがあるんじゃないか、と感じますね。とてもしんどくて、辛いけれども……。

松山 政治家となつて苦労されたことは……。

大平 ほくは昭和二十七年に政界に入つたんですが、ずーっと順調にきて、三十五年には、政務次官さえ一度もやらずに（内閣）官房長官になつてしまつた。あのときは、無我夢中で池田さんをついでやつたね。あれは冒険だつたね、たしかに。いま考えてみると、あのときぼくはたいしたことじやないように思つてやつただけど、あとから考えてみると、あれはたいへんなことだつたんだな。あれすんだときには、もうやれやれ、こんなこと一生やるまいと思つた。

松山 うれしかったですか。

大平 いや、うれしいもうれしくないもないんだ。ただ、あれよあれよというまにああなつてしまつた。それで、ぼくはいつの間にか官房長官に座つておつた、池田内閣の番頭になつておつた。その後、おやじさんとけんかばかりしよつたけどね。

官僚性の克服をねがいつつ

松山 先生は官僚出身だから官僚政治家だという意見もありますが……。

大平 官僚性とはどういうことかという点、私も十六年余り役人をやつてみて思うのだが、役人というのほだいたい先例を尊重しますね。先例どおりやつとけば、まず無難だという考えがある。つまり冒険を好まない。ところが、考えてみるとこの官僚性というのは大なり小なり官僚だけにではなく、

みんなにあると思うんです。で、そういうものが強い人が官僚性の強い人で、その稀薄な人が官僚性を脱却できた人だと思えますがね。私なんかもどちらかというと、そういう意味では、やっぱり官僚的性格をもっていますね。まあ前の人ややって間違いないこと、だいたいそれでやればいいじゃないか、奇を衒う必要はないじゃないかというようにね。新しい冒険を試みるには勇氣が足りないとか、思い切りが悪いとかいうところがあるんですね。だから、ぼくはやっぱり官僚性をもつてると思いますよ。

で、いまぼくの努力は、これをどう脱却しようかということ、自分で闘っておるといのが正直なところ。すでに官僚性を脱却して、りっぱな政治家になっておるとはとも言えないと思えますね。まだ相当、官僚性の残滓をもっており。できるだけそいつをなくさなきゃいかん。とりわけもつと勇氣をもたなきゃいかん。もつと土根性が座らにゃいかん、ということばかり毎日、自分にいうて聞かせてる……。

松山　　そういう日々ですか。

大平　　そういう日々ですよ。

分別をもつて進むべきこれからの時代

松山　池田内閣の当時、所得倍増計画を立案されたかげの立役者は大平先生だったというようにも聞いておりますけれども、日本人の生活がこのような状態だったらいちばんいい、とお考えになったようになっておりますでしょうか。

大平 当時考えたよりよくなった面、悪くなった面がありますね。

松山 よくなった面というのは物質的な面ですか。

大平 物質的な豊かさは、たしかに当時考えたよりはずっと速いテンポ、大きな規模で達成しましたね。けれども、それが一方で、公害だ、都市問題だ、交通問題だ、人間関係だ、連帯感の崩壊だと、いろんな形で裏目に出ていることについては、当時われわれは正直いって、そういう透徹した洞察力はもっていませんでしたね。

松山 戦争が終つてから二十七年ですけれども、非常な速い速度でもって世の中が変わつてき、そしてわれわれ自身も変わつてきたわけですから、これから先の四半世紀は、これまでよりもっと速いテンポで変わるといふふうに考えられますか。

大平 ええ。もっと速いテンポで変わると思います。問題はその変わり方ですよ。いままでの四分の一世紀というのは、まず食うこと、着ること、職にありつくこと、住いをなんとか構えること、そんなことを一生懸命追求してきたんじゃないでしょうか。いわば、いちおうのわれわれの幸せの物的条件というようなものを整うべくなりふりかまわずやってきました。

松山 突つ走つてきましたね。

大平 息もつかずに走つてきたような四分の一世紀だったと思います。いまは過去においてなしとげたものをふり返り、そのメリットは活かすが、そのデメリットは消していくということです。それから、世界に起こつた大きな変化、そういうものに対して、われわれはなにをすべきか、なにをしなきゃならんか、そういう分別をもつて、次の四分の一世紀を進むべきである。世の中のパターンがぜんぜん変わってきたし、道標が変わってきた。だから、これまでと変わり方の態様が違つてくるわけで

すね。

政治家の指導とは？

松山　そこで、私は政治家に要求されるのは、やはり一つの思想になっていくんじゃないかと思いませんけれども……。

大平　思想家である前に、政治家はやっぱりごくあたりまえの人間でなければなりませんね。別な世の人間じゃない。みんな喜怒哀楽を持った平凡な人間なんです。しかし、その政治家がやることはこういう仕事だということですから、国民のみんなに勇気づけたり、希望を持っていたくようにしなければならぬ。自分がえらいのではなく、自分のやっておる機能　働きというのは、国全体のこと、公のことですから、みんなが、あの方々があ言っておるんだから、というようになる必要があるでしょう。つまり信頼してもらおうような人間でなければならぬということですね。それからさらにあなたが言われるように、欲をいえば、深い思想を持ってみんなを指導するということか、エンカレッジするというか、みんなにやる気を起こしていただくようなことができる、そういう人であってほしいと思うんです。私なんかはまだ修業中です。

松山　そんなことをおっしゃられると私もまいるんですけれども……（笑）、おっしゃる意味は非常によくわかります。ぼくが一国民としてかりに政治家に望もうとするならば、やはりいまおっしゃられたような信頼に基づいた指導者であってほしいと、いつぶつに考えますね。

大平　その指導という意味ですね、指導という意味が、国民の方には何もいから政治家に指導し

てもらいたい……、それじゃ指導者になってやるうというようなことじゃ困るんです。国民の願いと
 というようなものをまとめまして、それを実現していく方便も組織もいちおう心得て、それで、どうで
 すかみなさん、こういうことでないこうじゃなく、いつような指導というか相談というか、そ
 ういうようなものでなければならぬ。自分の方からの独善的な指導精神、指導組織をおしつける、
 そういうようなものではないかと思えますね。

要求される謙虚な吸収力

松山 いま非常に極端な例をあげれば、戦争中、私たちはあんまりほんとうのことを知らされてい
 ませんでしたし、教育にしても神国日本であるとか、あるいは美しい国であるとか、強い国である
 か、あるいはやさしい民族っていうふうに教えられてきたけれども、あとでこの戦争が終ってからま
 た別の面がたくさんあったことを知らされました。

で、いま先生がおっしゃったような国民の信頼にもとづいて、いっしょに考え、いっしょに学び、
 いっしょに行動を起こしていくため、最も的確にその情報を知らせたり、もらったりするという方法
 では、何が現在いちばん国民とのつながりがあるのでしょうか、雑誌であるとか、新聞であるとか、
 テレビであるとか、ラジオであるとかというようなものがありますけれども……。

大平 もうそういう情報は洪水ですね。だから、これをたねねんに整理して、何がほんとうの国民
 の願いかという点を洞察して、そして、それを実現していく上で、どういう手順、どういう仕組みを
 考えたらいいか、というようなことを考える必要があるのじゃないかと思えます。

また、政治家は多くの方々の意見を謙虚に聞き、豊富に情報を吸収して、そういうことに応えていかなければならぬと思いますね。だから、まず謙虚な吸収力というようなものが要求されるんじゃないでしょうかね。それと同時に、それを実行する場合の忍耐力、そしてそれについての抵抗に耐えていくだけの勇気を持たなければいかんではないでしょうかね。

平和の中で秩序を守る

松山 先生の政策の中に、「平和を創造する国家」というようなおことばがありました。平和を創造するために、先生も含めて私たちは内に向って何をすべきか、外に向って何をすべきか、という問題がございますね。

大平 「平和の創造」ということばから説明しないとイケないと思います。それはもっと正確にいうと、平和の中で秩序をどうつくり上げるかということ。つまり、戦争がない状態というだけでは足りぬと思うのです。

松山 そうですね。それだけでは必ずしも平和とはいえませんがね。

大平 戦争というのはむしろ秩序的なもので、ちゃんと戦争目的というのがあるわけですね。それが至高の価値で、それにせんぶが奉仕する秩序があるわけです。政治にとりましては、そういう状態はたいへんやりやすい。秩序ができて上がっているものだから。ところが平和といつものは目的がないんです。だから、国の中ではみんなが思い思いのことをいい、世界ではそれぞれの国々が思い思いのことをやっております。つまり極端に多極化してあるんですから、その中で秩序を創造するということとは非常にむ

ずかしい、戦争をやるよりむずかしいということ、私はしみじみ感じるわけです。

だから、日本が平和創造国家でなきゃならんという意味は、まず日本は大国の武力のゲームは、もうごめんだという堅い決意をせにゃならんということです。日本が多極化された世界の中で、自分の名誉と自分の生存を守って世界の人から評価も受け、信頼も受け、少なくともつまはじきにならないというようにするには、どうしたらいいかと真剣に考えなければいかんんじゃないか、という感じがね。

で、それをやっていきますことが政治の目標でなければならんが、日本は国民全体が家庭においても、職場においても、地域社会におきましても、国の場面におきましても、絶えずそれを考えておる国である。つまりこれからは、平和の中でどうして秩序を保つかというようなことが、最大の時代の課題になってきておると思いますね。

松山 いままでには戦争と戦争の間が平和というふうな簡単な呼び名で呼んでいましたけれども、それは決して平和ではなくて、ただ戦争がなかったというにすぎない……。

大平 ええ。戦争と戦争との間の一時的な休息であるというか、もっといえば、戦争の後始末と、その次の戦争の準備で、たまたま撃ち合いがないという状態を平和と考えておった。いまの平和というのは、これまで誰も経験したことがない、とてもえたいの知れない平和ですね。

松山 そうすると、初めてぶつかるといふふうには解釈してもよろしいでしょうか。

大平 ええ。人類の歴史が始まって以来、初めて、私は平和の困難という問題に直面したと、ほんとうの意味で、そのような認識でございませう。

毎日汗をかいている姿が歴史である

松山 いま最も今日が平和だと仮定するならば、われわれの問われているのは秩序ある平和を維持することができるかということですね。こんどは先ほどの問題にまた戻って、その秩序という問題になっていきますけれども、その秩序を形づくるのは一つ一つの平和な家庭ですか。そこいらへんが、ぼくにはよくわからないんです。

大平 まずみんなが何かのまとまりをつくるうじやないかという問題意識を持つことですか。どうなってもいいんだというようなことではなく、何かみんなで分別を出そうじやないかという、そういう心がまえがまず根底にないといけない。みんながそうやるについては、お互いが理解し合わねばならんから、十分な意見の交換も必要だし、情報の生産や流通も必要だ。いろんなことが行われて、そういうものをこんど一つのまとまりに持っていく方法論についても、みんなが理解を持たなければならぬ。それには非常に忍耐強い努力がいるわけだ。無限の忍耐がいるんじゃないでしょうか。そういうような感じがします。そして、それは永遠に達せられないものだということも覚悟しておかなければならない。

よく考えてみると、神さまはそんなに簡単に答えを示されない。それは、私は人類に対する神さまの愛情だと思う。簡単に答えが出てしまったら、もう終りですからね。それから退屈さが始まり、歴史の進行がとまってしまふ。ぼくは、平和の創造と一口にいうけれど、いつまでたっても、これは達せられない道標だと思う。しかし、それを達するべく一生懸命に毎日、汗をかいておるといふ姿が歴

史であると見るべきでしょう。

いまもぼくは結婚式であいさつしてきたんだけれども、いまはちょうど風薫り、緑したたる野山のシーズンだけれども、やがて灼熱の夏がくるだろう。それから、その次はもみじの秋に席を譲るにきまつておる。そうして、こんどはまた霜が降り、雪が積る苛烈な冬になる。きょう誕生した一つの新家庭という木も、いつかは花を咲かせて散っていくだろうし、やがて枯れるであろう。だけれども、それに丹念に水をやるということが人生じゃないのか。霜にもめげず雪にも耐えていくような幹をつくらという、その過程が非常に大事なんだというような意味のことをあいさつしたんです。

大きくいえば、どうせこの人類なんていつかは滅亡する。そうかといってどうせ先々われわれはだめになるんだから、やけくそでいいというわけにはいかんだろう。そういう意味で、毎日毎日、丹念にそのプロセスをかみしめていくこうじゃないか。そういう感じですね。

日本の持つ変化への対応力

松山 先生がおっしゃるように、どうすることもできないから、やけのやんばちでいいっていうわけにはいかないんだけど、いったい何年ぐらい先までの理想を持つことが出来るものでしょうが。この変化のほげしい時代に国家百年の計を立てていくというふうなことはできませんでしょう。

大平 いや、私は、百年という時間帯において日本の将来を考えてみると、これはそうとういい国になれると思うんです。やり方によって、この四つの島をもっと住みよくできると思うんです。もっとバランスのとれた、住みよい世界にするだけの経済力、技術力、計画能力、行政能力……そういう

ものを日本人は持つておると思うんです。したがって、いまの公害問題とか、交通問題とか……公害は目に見えるものと目に見えんものといろいろありますが、そういうような問題について、いちおうの手当てをなしうる民族になるんじゃないか。それから、やり方によっては世界から、ある種の畏敬というか、評価を受ける国になれるんじゃないかという感じがします。

心の世界では、みんなで努力していけば、そこにおのずからある種の日本人的分別が出てくる。それを組織して、それで日本の内外に対する秩序、マナーというようなものをつくり上げていくことも不可能ではないと思います。さきさき資源が枯渇するとか、動力がなくなるとかいうような、もつと先のことを考えちゃうと、非常にベシミスムになります。けれども百年ぐらいの時間帯において考えてみると、日本という国はそうとうすばらしい国になりうるんじゃないかならうか。現に私は、いまの平和の創造の問題で、日本人はそうとうの能力を発揮しておると思いますよ。アメリカやヨーロッパよりは時代の変化に対する対応力を持つておると思いますね。われわれは、たとえばいまの家庭のあり方、あるいは企業のあり方などについて、合理主義からいくと合理的じゃないものをたくさん持つていますけど、しかし、その非合理的な中にいろんな矛盾を吸収していくだけの何か、キャパシティーを持つておるんですね。それは日本の一つの文化的な特徴というような感じがしますね。

平凡なグッドハートの男

松山 ご自分の性格を一口でいうと……。

大平 (しばし考えて) 平凡な人間です。秀才でもないし、独創的な敏才かというところ、そうでもない

い。

松山 きわめてむずかしい ですね(笑)。

大平 平凡な男ですよ。そしてこれは、ぼくがいうとちよっといいますきになるんで、いわないことにしているんだけれどね、人はいいんですよ。グッドハートなんですよ。ところがグッドハートであるのに、手のこんだ人のように見られる。よくわからない男のように見られるんだね。

松山 最後に俗な質問ですが、総裁候補といわれることをどうお感じになりますか。

大平 特別、感じませんね。

松山 ということは、はじめて政治家になったときと同じような気持ちですか。

大平 ええ、別に特別な感慨はないですよ。

松山 内容は充実しているでしょうが、終始一貫、姿勢は同じなんですね。

大平 なんかこう、鉛のように重い感じしております。

松山 先生、ご健康でいらっしゃいますか。

大平 健康です。

松山 それでは、ご健闘をお祈りいたします。